



Title	矢印にみる日本の方針指示表記の変遷
Author(s)	近藤, 晶
Citation	デザイン理論. 2012, 60, p. 98-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53608
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

矢印にみる日本の方針指示表記の変遷

近藤 晶／福井工業大学

矢印成立以前

後述する通り、日本の方針指示としての矢印は西洋からもたらされた。この西洋で最も古く見られる矢はフランスのニオー洞窟壁画にある矢である。ここでは、ビゾンの腹部に複数の矢が重ねて描かれている。しかし、壁画で使用される矢は方針指示のために用いられたものではなく、狩猟の成功を祈る呪術的な意味合いが強かった。

西洋での矢印の成立はかなり遅く、それ以前には身体を使い、矢印と同様の表記をしていた。ギリシャの敷石には足を女性の顔と並べて描くことで、この先に壳春宿が有ることを示している他、13世紀に描かれたモーゼが十戒を受け取る絵画でも指差しによって、民衆に対するモーゼの怒りの方向を示している。指差しによる方向の指示は長い期間様々な場所で使用されており書籍で脚注参照を促す目的でも使用されていた。

西洋における矢印の成立と発展

西洋で現在の矢印と近い形のものを見ることが出来るのは15世紀に入ってからになる。この頃、大航海時代に入り、方向を正確に示す必要が出てきたためである。しかし、矢印が使用される一方でフルール・ド・リスも同時に羅針盤やコンパスローズで使用されており、また指差しの記号も頻繁に使用されていたことから、この時期には様々な表記方法が混在していたと推測される。

このように大航海時代のニーズにより成立した矢印は18世紀の産業革命によって、より効果的に使用されるようになる。産業革命以

降の図面には機械の複雑化に伴い正確性が求められるようになり、ここで矢印が広く活用されるようになる。1776年のジェームズ・ワットによるエンジンポンプの図面では、エンジンの内径を現在と同じように矢印を用いて示している。これ以後、矢印は図面で多用され、20世紀初頭には、ほぼ現在と同じように矢印が使用されるようになる。

図面で盛んに使用されるようになった後、グラフィックデザインではそれまでの写実的なポスター表現から、構成主義的な手法によるポスター表現が盛んに見られるようになる。この幾何学的な構成の流れに矢印が図形として使用され、グラフィックデザインで盛んに矢印が使用されるようになった。

特にロトチェンコ、エル・リシツキー、ヘルベルト・バイヤーらは矢印の形状を分解・再構成することで、より画面構成を優位にする矢印を作り出し、ヤン・チヒヨルトらのような次のデザインの流れに矢印が受け継がれていくこととなる。

日本における矢印の成立と発展

日本では矢を用いた図案は古くから見られていたものの、矢印という形で独自に成立することはなく、西洋からもたらされることになる。日本人が最初に矢印を目にしたのはおそらく、ポルトガル人の来航によりもたらされた航海地図にあるコンパスローズの矢印である。

地図に記載されたコンパスローズ等の矢印は安土桃山時代から江戸時代初期にかけて流行した世界図屏風の広がりと共に日本各地へ

広まったと見られるが、世界図屏風にはコンパスローズが書き込まれず、矢印が地図と共に日本へ浸透することは無かった。世界図屏風だけでなく、通常の地図も作られてはいたが、こちらにも方位を示すために矢印は使用されておらず方位に対する意識の低さが伺える。日本の地図にコンパスローズが書きこまれたのは1779年に制作された改正輿地路程全図であり、ここに書きこまれたコンパスローズはフルール・ド・リスを使った西洋のものと同じコンパスローズであったことから、西洋の方位指示の手法が参考にされていたことが分かる。

日本におけるグラフィックデザインと矢印

ヨーロッパで構成主義的なポスターが出てきた頃、日本では「大戦ポスター展」が開催され、これを記念した「大戦ポスター集」や3冊組の「ポスター」といった本が相次いで出版される。これにより、ヨーロッパでの構成主義的なポスターが紹介され、それまで美人画と呼ばれるようなポスターが大半を占めていた日本のグラフィックデザインに大きな影響を与えた。中でも、「大戦ポスター集」に掲載された菅原教造の論考には「単化」の有用性が説かれ、「単化」という考え方方が広まる。ここでの「単化」とは幾何学的な图形を用いるなどした抽象的・象徴的表現のことを指し、矢印はこの考え方と合致していることから、使用される事となった。

日本のグラフィックデザインにおいて矢印が使用される当初は「方向」や「動き」を表現するために使用されていたが、「街の図案家」と呼ばれる人々によって矢印の扱いがその意味を無視して模倣されることになり、1930年前後の一時期に矢印は「図案」として使用される。しかし、日本でグラフィックデザインに関する団体が作られ、様々な広告に

関する書籍が発行される事により、表面的な模倣が次第に少なくなり、無意味に「図案」として使用される矢印は減少していく。

一方で、より積極的に「図案」としての矢印を用いる試みが行われ、中でも山名文夫と亀倉雄策の2名は同時期に活躍したグラフィックデザイナーたちと比べて多くの矢印を用いた作品を残している。

彼らの作品は欧米のデザインで使用される矢印を参考にしているが、1930年前後の模倣された矢印ではなく、彼ら自身により再構成されている。例えば山名文夫が1930年に制作した挿絵では矢印が使用されているが、その扱い方が1925年にロト・チェンコが制作したUSSR内の矢印の扱いと類似しており、参考にしたことが伺える。

また、亀倉雄策は自身の作品集の作品解説で「矢印が好き」と明記しており、矢印に対する意識の高さを知ることができる。彼も欧米の矢印の扱いを参考にしており、矢印が使用される作品数の変化から、欧米へ渡航した際に影響を受けたことが分かる。中でも1959年に制作した「シドニー貿易市」のポスターとレスタービオールが1952年に制作した「Europe, United States Lines」の広告は、ストライプが大きな矢印を構成するという同じ手法が使われており、また矢印が「シドニー貿易市」では貿易という移動の象徴として、「Europe, United States Lines」では旅行という移動の象徴として使用されており、コンセプトの類似性も見られる。

しかし、矢印を象徴的に用いた手法の限界も亀倉は感じ始め、それ以後矢印を使った作品は少なくなる。同時に他のデザイナーたちの作品も「図案」としての矢印が少なくなり、「方向」や「動き」を表現する本来の矢印の使用へと回帰していった。